

財務会計論



財務会計論-計算担当
新井 良明 講師

本試験を振り返って ～出題傾向・合格ライン等～

久野 最後に、12月7日4限(15:40着席、16:00～18:00)に行われた財務会計論です。今回の試験は、どの科目でも従来と比べて変化する可能性が高かったのですが、財務会計論でも変化がありましたね。

財務会計論では、問題7について問題文の「資産除却債務残高」を「資産除去債務残高」に、問題11について記述エの「財」を「財貨」にする修正があったようです。(追記:さらに12月8日、問題23～26について[資料Ⅰ]5.の「100ドル」を「100千ドル」と修正されています。)

先ほど、新井先生からは「計算の配点が低くなったなあ・・・」ということでしたし、久保先生からは「形式面での変化が印象的でした。」ということでした。

新井先生、財務会計論全体として、計算としてどのような印象を持たれましたか。

新井 従来の短答式本試験の問題と比較すると今回の短答式本試験では、大きく二つの違いがありました。

一つは選択肢の増加です。他の科目では選択肢が6択の問題が以前から出題されていましたが、財務会計論では今回初めて6択の問題が出題されています。計算については正しい数値を算定することには変わりはないわけですから、さほど影響はないといえますが、理論に関してはそうとは言えなさそうですね。

もう一つは、冒頭に申し上げた計算の配点減少です。財務会計論32問のうち、計算は8点問題で8問前後、解答箇所7箇所の総合問題が2問という構成でここ5年間変わらず出題されてきました。ところが、今回は8点問題が10問、解答箇所4箇所の総合問題が1問となりました。総合問題の配点は1箇所につき6点ですから、計算の配点が104点と、従来に比べて減少しています。

久野 久保先生、財務会計論全体としては、ここ5年(10回)程度安定した形式だったのですが、この配点面の変化を詳しく話せますか。

久保 平成22年度第Ⅰ回試験から昨年度第Ⅱ回試験まで合計10回の短答式試験において継続されていた出題形式が、本年度第Ⅰ回試験では大きく変わりました。具体的には、昨年度第Ⅱ回試験までは、個別問題18問(各8点)と総合問題形式14問(各4点)という出題形式であったのが、本年度第Ⅰ回試験では、個別問題22問(各8点)と総合問題形式4問(各6点)という出題形式になりました。また、この影響で、計算と理論の出題割合も変わりました。具体的には、昨年度第Ⅱ回試験までは、個別問題18問のうち9問～10問程度が理論問題であったのが、本年度第Ⅰ回試験では、個別問題22問のうち12問が理論問題でした。割合としては、計算:理論=約60%:約40%であったのが、計算:理論=52%:48%となりました。

久野 「4肢6択」化は新井先生からの指摘にもありますように、理論面では影響ありますよね。久保先生、いかがですか。

久保 昨年度第Ⅰ回試験、第Ⅱ回試験では、ほとんどの問題がア～エの4つの選択肢について、正しい選択肢の組合せか誤っている選択肢の組合せかを5択(1.～5.)から選ぶという形式でした。しかし、本年度第Ⅰ回試験は、ほとんどの問題がア～エの4つの選択肢について、正しい選択肢の組合せか誤っている選択肢の組合せかを6択(1.～6.)から選ぶという形式に変更されていました。

ここで、近年の財務会計論の理論部分の出題形式を概観してみます。少し古くなりますが、平成25年度第Ⅰ回試験まではア～オの5つの選択肢が示される問題がほとんどでしたが、平成25年度第Ⅱ回試験においてア～エの4つの選択肢が示される問題がほとんどとなりました。そして、昨年度(平成26年度)第Ⅱ回試験までは、正しい選択肢の組合せか誤っている選択肢の組合せかを5択(1.～5.)から選ぶという形式でしたが、本年度第Ⅰ回試験では、前述のとおり、

財務会計論



財務会計論-理論担当
久保 慎悟 講師

本試験を振り返って ～出題傾向・合格ライン等～

正しい選択肢の組合せか誤っている選択肢の組合せかを6択(1.～6.)から選ぶという形式に変更されました。

このような出題形式の変更の理由について、出題主体ではない我々は推測するしか出来ませんが、“選択肢の組合せから正答に辿り着くのを阻止する”ためという理由が考えられます。どう言うことかといいますと、従来のようにア～オの5つの選択肢が示される問題において正しい選択肢の組合せか誤っている選択肢の組合せかを5択(1.～5.)から選ぶという形式の場合、ア～オの一部の選択肢の正誤が分からなくても、選択肢の組合せから正答に辿り着く可能性が十分にありますが、本年度第I回試験のような形式では、選択肢の組合せから正答に辿り着くことはほぼ不可能だということです。このような形式面の変更が何故ゆえなされたかはさておき、事実として、受験上のテクニックが活かしづらい問題形式になってきていることは、我々講師陣も、今後受験する受講生も肝に銘ずる必要があるといえます。

久野 他に、例えば公認会計士・監査審査会の公表する「出題範囲の要旨」と比較して、今回の短答式試験で気になる点はありましたか。

久保 財務会計論の理論部分に関しては、「出題範囲の要旨」との大きな乖離はありません。ただし、少しだけ気になったのが、些か細かすぎる論点の出題です。各問の解説のところでもお話しする予定ですが、余りに細かい実務上の知識を問うような問題は、「論文式試験を受験するために必要な知識を体系的に理解しているか否かを客観的に判定する試験」として実施されている短答式試験の趣旨に必ずしも合致しないのではないかと個人的には思っています。受験生の正当な努力が報われるような出題が望まれます。

久野 いささか細かすぎる論点ですか…、私も久保先生の同じ見解を持ちますね。

それでは、個々の問題についてコメントをお願いします。問題1から問題3は理論ですので、久保先生からですね。

久保 問題1は「財務会計の機能と制度・財務会計の基礎概念」に関する問題です。非常に素直な良問です。講義や答練で扱っている論点ですので、必ず正答していただきたいところです。難易度はAですね。

問題2は「会社法会計」に関する問題です。少し取っつきにくい問題であったかと思います。ただし、イの選択肢は答練で扱っている論点ですし、エの選択肢は、監査論における知識があれば判断出来るかと思いますので、出来れば正答していただきたいところです。難易度はBです。

問題3は「資産会計総論」に関する問題です。イの選択肢以外は、すべて講義や答練で扱っている論点です。また、イの選択肢も、問題文を素直に読めば判断できるかと思います。必ず正答していただきたいところです。難易度はAです。

久野 次は、計算、新井先生ですね。問題順をお願いします。

新井 問題4は「現金預金」の問題です。標準的な問題でしたので、確実に正答してほしい問題です。

問題5は「売価還元法」の問題です。こちらも標準的な問題でした。問題4と同様確実に正答してほしい問題です。

問題6は「ソフトウェア」の問題です。難易度自体は標準的でした。見込販売数量に基づく減価償却においては、X2年12月期における減価償却を実施した後の未償却残高が見込販売収益の額を上回っているため当該超過額を一時の費用として処理する事になりますが、こちらを減価償却に含めた選択肢が解答になかったため、その点から当該費用を減価償却に含めていない点を読み取っていただければ良かったと思います。

問題7は「資産除去債務」の問題です。耐用年数終了時の支出額を期末時点まで割り引くことで資産除去債務の金額が求まることを理解していれば、解答数値の算定は比較的易しく行う事が出来たと思います。

久保 問題8は「負債会計」に関する問題です。かなり難しい問題だと思われます。アとウの選択肢は、講義や答練で扱っ

ている論点ですので、すぐに判断できるのですが、それだけでは正答に辿り着けません。本問が負債会計（引当金）に関する問題として出題されているのに、イの選択肢では、終始、資産の話がなされているため、正誤の判断は甚だしく困難だと思われます。また、エの選択肢は、些か細かい実務上の規定を問うたものですので、これも正誤の判断は困難かと思います。以上より、正答できなくても致し方ないと思われます。難易度はCです。

問題9は「注記事項」に関する問題です。注記に関する問題ですので、重箱の隅をつつくような細かい実務上の規定の出題がなされているのかと内心冷や冷やしていましたが、蓋を開けてみるとそうではありませんでした。出題されている内容は、注記事項としてスタンダードなものであり、財務会計論と監査論の知識をしっかりと持っていれば、正答に辿り着くのは難しくないです。必ず正答していただきたいところです。難易度はAです。

新井 問題10は「有価証券」の問題です。売買目的有価証券の評価差額は切放処理、その他資本剰余金の処分により行われた配当は、その他有価証券なので投資勘定を減額し、受取配当金で処理しないといったように、与えられた問題文を正確に把握した上で解答すれば正答にたどり着けると思います。

久保 問題11は「ストック・オプション等」に関する問題です。本問は、細かい知



識や難しい内容を出题していますが、実は、アとウの選択肢を判断できれば、正答に辿り着くことが出来ます。そして、アとウの選択肢は、内容としては平易ですので、これらの選択肢を判断することにより、出来れば正答に辿り着いていただきたかったです。イの選択肢やエの選択肢は、細かい知識や難しい内容を含んでいますので判断できなくても致し方ないと思われます。難易度はBです。

新井 問題12は「ストック・オプション」の問題です。勤務条件または業績条件のいずれかの条件が達成された場合に権利が確定するケースが出题されております。詳しくは解説で触れますが、X2年12月期に業績条件の達成見込が変更されていたため、この部分について考慮できたかがポイントになります。

久保 問題13は「リース取引」に関する問題です。リース取引に関する典型的な引っかけが多く出題されています。いずれも講義や答練で扱っている内容ですので、必ず正答していただきたかったところです。難易度はAです。

新井 問題14は「リース取引」の問題です。借手と貸手の会計処理両方が問われた問題です。借手のリース資産計上額の算定に注意していただければ正答出来たと問題だと思います。

久保 問題15は「退職給付会計」に関する問題です。アの選択肢は、些か細かい知識を問うていますので判断は困難だったかと思いますが、他の選択肢は、講義や答練で扱っている内容ですので、しっかりと判断が出来たと思われます。必ず正答していただきたかったところです。難易度はAです。

新井 問題16は「退職給付会計」の問題です。期末において未認識の差異に着目し、差異が借方なのか貸方なのかを正確に算定するとともに、税効果会計を考慮し忘れることがなければ確実に算定できる問題だと思います。

問題17は「税効果会計」の問題です。こちらは後回しにすべき問題ですね。解答出来なくてもあまり可否に影響はないと思います。法人税等の金額及び法人税等調整額を正しく算定出来たのかがポイントになります。しかし、あまり見慣れない住民税均等割が出题されており、複数の一時差異を推定する必要があるなど、算定が困難な問題ですので非常に

難易度が高い問題であったと言えます。

久野 問題18～問題21はここまでの理論問題と雰囲気の違いですね。

久保 問題18は「外貨換算会計」に関する問題です。実は、ここまでの理論問題は、出題形式こそ変化はあれど、内容としては標準的なものが多く、学習を積み重ねてきた受験生におかれましては、十分な得点が出来ているかと思われます。しかしながら、本年度第Ⅰ回試験の本番はここからです…。ここから4問連続で、かなり解きにくい問題が続きます。では、最初の問題から行きましょう。

本問は、正しい選択肢が1つだけありますが、細かい実務上の規定を問うた選択肢ですので、選び出すのは甚だ困難です。そのため、誤っている選択肢を4つともしっかりと判断しなければなりません。1.～4.の選択肢は、内容こそ平易ですが、すべて誤っていると判断しなければならないため、かなり勇気が必要だったかと思います。出来れば正答していただきたいところです。難易度はBです。

問題19は「固定資産の減損」に関する問題です。さて、次ですね、かなり長い文章で、かつ、グルーピングの実務上の留意点が並んだとても厄介な選択肢のオンパレードです。ただ、1つだけ光明が差しているところがあります。1.の選択肢は、答練でほぼ同じ問題を出題していますので、答練をしっかりと復習していただければ判断できたかと思います。本問は、実は、この1.の選択肢だけで正答に辿り着けますので、出来れば正答していただきたいところです。こちらも難易度はBとします。

問題20は「企業結合・事業分離」に関する問題です。心が折れそうになるのをぐっと堪えて頑張りましょう。こちらも長めの文章で、かつ、企業結合日や事業分離日といった些か会計とは関係がないようなものを題材にした選択肢のフルコースです。ただ、こちらも心を折られずにしっかりと各選択肢を熟読・検討していただけると、実は4.の選択肢の判断は平易です。そして、こちらも4.の選択肢の判断により正答に辿り着けます。以上より、本問は4.の選択肢をしっかりと判断し、必ず正答していただきたいところです。こちらの難易度はAとします。

問題21は「四半期財務諸表」に関する問題です。過酷なロードの最後ですが、とどめは、近年頻出している四半期の簡便な会計処理の問題です。内容は、細かい実務上の規定ばかりで、かつ、全ての選択肢を正しいと判断しなければならないというエッセンス付きです。本試験の緊張下では、かなり難しかったと思われますが、出来れば正答していただきたいところです。一応、難易度はBとします。

新井 問題22は「四半期財務諸表」の問題です。税金費用の計算について、簡便的な会計処理及び四半期特有の会計処理が出題されています。問題文の指示に従い、落ち着いて対応すれば正答可能であった問題だと思います。

久野 最後は計算の総合問題ですね。

新井 問題23～26は「在外子会社の連結に関する総合問題」です。前回の総合問題と同じくキャッシュ・フローの算定も含まれています。

問題23・24は確実に正答すべき内容です。**問題25**は問われている内容が利益剰余金ですから、一見するとややこしいように見えますが、比較的標準的な難易度です。もっとも苦戦するのは**問題26**です。個別財務諸表をヒントに営業活動によるキャッシュ・フローの金額を算定する問題ですが、こちらは後回しにさせていただいて構いません。

問題27は・・・、そうか、問題26で終わりでしたね。長らく32問の出題が続きましたから何となく違和感がありますね（笑）
久野 ですよ。32問というか規定されている最大問数40問に対応できるようTACで設定してあるいろんな帳票類がスカスカになっちゃいますね。

さて、平成26年短答式試験は第Ⅰ回・第Ⅱ回とも、個人的には、合格者数に違和感がありました。2年前の平成25年試験の合格者水準を前提として、短答式試験合格者として財務会計論でどれくらいの得点比率が求められるのでしょうか。

新井 財務会計論－計算では、7割超は正答しておきたいでしょう。正答すべき問題を挙げますと、問題4, 5, 6, 7, 10, 14, 16, 22の8問です。そのうち、本試験の緊張によるミスも考慮にいれても7問は正答したいです。加えて総合問題で問題23, 24, 25の3箇所を正答出来ると74点。7割を少し上回ります。他の科目の難易度との兼ね合いを考えると財務計算で多く正答したいです。したがって、予想されるボーダーよりも上回るのが理想です。

久保 財務会計論－理論としては、各問の解説で、「細かい実務上の規定」だとか、「過酷」だとか、いいましたが、実は、しっかりと正誤の判断をすべきところをすれば、十分な得点が獲得できます。あくまでも講師の主観ですが、合格者としては、問題1, 3, 9, 13, 15, 20の6問（難易度A）は必ず正答していると思われます。また、問題2, 11, 18, 19, 21の5問（難易度B）は半分程度正答していると思われます。ただし、問題8（難易度C）は正答できなくても致し方ないと思われます。そうしますと、合計で8.5問は正答していることになり、割合としては70%超（8.5問／12問）となります。

以上のことを総合しますと、財務会計論の理論部分では、8問がボーダーになるかと思います。

久野 計算個別で56点、計算総合で18点、理論で64点、合計138点・69%ですか。ちょっと高めかな。どうなんでしょう。受験生さんたち、なんか元気が感じられないんですね。69%確保できていると若干のアドバンテージがあるんじゃないかな。

個別成績相談をしていると、理論中心の学習スタイルの結果、計算についてジワジワとポジションを下げていく人、上に上げられない人が見受けられます。そんな方に、新井先生、どんなアドバイスがありますか。

新井 今回の財務計算で思うように得点出来なかった方は、もう一度テキストの内容を「広く・薄く・まんべんなく」見直しをしてみてください。形式的な変更はあるものの、短答・論文を問わず基本的な問題が多いという傾向は変わりないようです。5月の短答式本試験・8月の論文式本試験も基本的な問題の出題が予想されます。復習が手薄な論点が基本的な難易度で出題されると、その問題を取り損ねた場合に非常にもったいないです。配点の傾向からすると、今後の学習において財務計算に割く時間が他の科目に比べて減る人も多いと思います。限られた学習時間の中で本試験での得点を最大化する意識を持ちながら、今後の学習に臨んで下さい。

久野 成績が上がっていく方たちの多くは、まず、計算が大きく遅れをとらないレベルになっていく傾向があるんですね。理論に資源配分をするのであれば、まず、計算を「広く・薄く・まんべんなく」現実性を高めていただきたいんですね。

久保先生、受講生の皆さんにメッセージをお願いします。

久保 自己採点で手応えがある方は、論文式試験に向けて邁進してください。就職状況が好転し、合格率も安定している今を逃さないように、論文式試験に盤石の体制で臨めるようにしっかりと準備をしておきましょう。

自己採点で手応えがない方も、勉強を続けましょう。手応えの度合いにより、短答式試験対策をするか論文式試験対策をするかは分かれるところですが（この辺はデータリサーチの結果を随時参照してください。そのためにもデータリサーチには積極的に参加しましょう！）、1ヶ月間のロスを生み出さないように今はとにかく前進しましょう。立ち止まる余裕はないはずです。明るい未来、輝く希望に向けて、たとえ苦しくても進み続けましょう。

今回の短答式試験を目指す入門基礎マスターの受講生の方は、将来に辿り着くべきレベルを今のうちからしっかりと認識しておきましょう。次は貴方たちの番です。基礎の積み上げこそが重要であるのは、どの学問でも同じですが、ここで再認識してください。本試験問題の中に、入門基礎マスターの知識レベルで解くことができる問題が何問かあったかと思います。そのような問題をきちんと解けるようになることこそが、結局は合格への近道なのです。日々一歩ずつ合格に向けて歩き続けていることを忘れずに頑張りましょう。

久野 新井先生、久保先生。ありがとうございました。

本試験をふりかえる



司会
久野 元靖 講師

最後に

久野 さて、改めて、受験生の皆さんが気にされる平成27年第I回短答式試験の予想合格ラインを検討してみましょう。

座談会冒頭にも述べましたが、公認会計士・監査審査会は、短答式試験の合格基準は、「試験実施規則」により「総点数の70%を基準として、公認会計士・監査審査会が相当と認めた得点比率となり、1科目につき、その満点の40%に満たないもののある者は、不合格となることがある。」とし、「試験の公平性の観点から、第I回短答式試験と第II回短答式試験の合格得点比率は、原則として同じとします。」としています。

平成22年および平成23年短答式試験では、合格率・合格者数の乖離をものともせず、第I回短答式試験の合格得点比率がそのまま第II回短答式試験の合格得点比率とされました。

平成24年短答式試験では第I回短答式試験の合格得点比率は70%、合格者数は820人、合格率は6.0%でしたが、第II回短答式試験の合格得点比率は67%、合格者数は454人、合格率は4.2%となり、初めて第I回と第II回とで合格得点比率が異なりました。

平成25年短答式試験では第I回・第II回試験とも合格得点比率は67%でした。第I回短答式試験の合格者数は1,071人、形式合格率は10.7%、実質合格率は13.6%、第II回短答式試験の合格者数は695人、形式合格率は8.7%、実質合格率は11.6%となっています。

平成26年短答式試験では第I回短答式試験の合格得点比率は70%、合格者数は1,003人、形式合格率は13.7%、実質合格率は16.7%、第II回短答式試験の合格得点比率は68%、合格者数は402人、形式合格率は6.1%、実質合格率は8.2%となっています。

平成25年試験以降、短答式試験の合格率が上昇しています。しかし、平成26年試験では、短答式試験の第I回と第II回とで合格率の乖離が顕著になっています。

この短答式試験合格率の推移は、おそらく、論文式試験受験者数が影響しているでしょうね。

平成24年論文式試験受験者3,542人、論文式試験合格者1,347人。

平成25年論文式試験受験者3,277人、論文式試験合格者1,178人。

平成26年論文式試験受験者2,994人、論文式試験合格者1,102人。

このような状況下で行われた今回の平成27年第I回短答式試験の受験者数（願書提出者数）は7,207人と公表されています。

ここでは、データリサーチ等の受験生さんの得点状況を見ることはできませんので、まず、各科目レベルで考えてみましょうか。

新井 財務会計論－計算ですが、7割超は正答しておきたいでしょう。個別問題で7問は正答したいです。加えて総合問題で3箇所を正答出来ると74点。7割を少し上回ります。

久保 財務会計論－理論では、8問がボーダーになるかと思います。

高岡 管理会計論では、全員正解扱いになると考えられる問題8も含めて単純合算すると64点が合格ラインとなります。ただし、本試験の緊張感やケアレスミスなどを勘案すると、ここから計算問題1問分（7～8点）差し引いた56～57点くらいが合格ラインではないでしょうか。

大橋 監査論では、70%前後の得点であれば、監査論が足を引っ張るということはないでしょうね。

田崎 企業法は、講師の話合いでは、合格点は70点をちょっと超える71～72点くらいではないかということでした。

久野 財務計算個別56点＋計算総合18点＋理論64点＋管理56点＋監査70点＋企業71点＝335点（67.0％）。明らかに昨年試験よりも低いですね。難度の高い試験だったことは間違いないようです。監査論は足を引っ張らないレベルってことですので、もう少し低い水準でも許容されるかもしれないですね。

ここまでの、そして、ここからの推定は受験者の皆さんの協力による「データリサーチ」の結果を見ずに行っています。したがって、その内容次第では、TACの予想合格ラインは修正されるかもしれません。また、合格得点比率・合格者数は、公認会計士・監査審査会によって決定されます。また、おそらくは、いくつかの問題で受験指導校の解答例が分かれることがあるかもしれません。過去には、受験指導校間で一致していた解答例が誤っていることになった場合もありますし、1つの問題について正解が2つあるとされたこともありますし、全員正解とされたこともあります。

さて・・・

（中略。この部分、議論が長くなりますし、諸般の事情もございますのでご容赦ください。）

久野 それでは、先生方、よろしいでしょうか。

12月7日、23時現在、予想合格ラインとして、

公認会計士・監査審査会が
論文式試験受験者数を考慮するならば
総点数の「67－数％」等、今までにない合格得点比率
となる可能性があります。

合格発表の日までは
前向きに、
合格発表の日までにやっておくべきことをしっかり学習
されることを願います。

とします。

なお、ここで話した予想合格ラインは、TACの最終予想合格ラインではありません。この座談会の状況が皆さんの目に触れる頃には、「データリサーチ確定集計結果」も公表されています。必ず、「データリサーチ確定集計結果」を参照してください。

久野 今回の平成27年第Ⅰ回短答式試験、前回の平成26年第Ⅱ回短答式試験同様、かなり得点のしにくい試験だったようですね。1年前の平成26年第Ⅰ回短答式試験が比較的取り組みやすい試験ただけに、う～ん、受験生さんが辛いと感じました。比較的安定していた平成25年短答式試験の合格水準なら合格できているでしょうという方が、前回の平成26年第Ⅱ回短答式試験で悔しい思いをし、また、今回もしかしたら……。公認会計士・監査審査会が公表する「総得点の70％の得点比率」を重視すると厳しい試験になりそうです。おそらくはそのような事にはならないと思いますし、今までどおり、実質的競争試験になるとは思っています。となると、どこまで合格得点比率が下がるんだろう、これは合格者数次第でしょうが。

さて、公認会計士試験に合格するために、1月～3月はとても大切な時期です。最終目標は論文式試験合格であることを見据えて、学習スケジュールを考えてください。これからは「論文式試験合格を目標とした体系的理解を深める学習」ないし「短答式試験合格に必要な正確な知識および短答式試験合格を後押しし論文式試験合格を目標とした体系的理解を深める学習」の時期です。おそらくは4月第2週からスタートする第1回論文式全国公開模試を一つの目標として学習を進めていってください。第1回論文式全国公開模試までに積み残しのない状態にしておけば、4月以降ないしは6月以降の効果的学習が可能になります。そのために、通常の論文基礎答練、論文応用答練の出題範囲指定に合わせて、毎回、仕上げた状態でいけば、自動的に第1回論文式全国公開模試までに数回転はできます。与えられるカリキュラムは利用しない手はない。そうそう、論文答練に追われて理論中心の学習になる方もいらっしゃるかもしれません。計算力の維持を忘れないように。計算力に不安がある方は論文答練が本格化する前に計算力を高めてください。計算力を高めておいて、計算問題さえ解けば

計算力が維持できるという状態・気持ちになることを早期に達成してください。計算に最低限の時間を割いて、遠慮なく理論に時間を配分できます。

短答式試験を5月に受験する場合、短答式試験対策に偏る、とか、論文式試験対策に偏るとかは禁物です。短答式試験対策と論文式試験対策って同時進行できます。同時並行じゃないですよ。論文式答練のための準備でテキスト等を読んでも、工夫次第で、同



時に、短答式試験対策もできます。短答式試験に気持ちよく合格するためには「正確な知識」と「体系的な理解」が両方とも必要です。理解を高めながら正確性もつける。バランスよく学習してください。車の両輪ですから、回らないと動かないし、どちらかが強いと曲がってしまう。1月から3月の間、「知識」と「理解」の同時進行ができれば、5月・8月のセット合格が見えてきます。

「何度受けても少し足りないんです。」なんて言葉も耳にします。「講師学習相談」とか「個別成績相談」とかで、学習方法をすぐに修正できる方もいらっしゃるようですね。「少し足りない」の原因をきちんと考えないと同じことの繰り返しになるかもしれません。計算なのか理論なのか、「みんなが取れるところを落とさない」って意味を誤解していないか、体系的な理解ができていないのに知識の詰め込みに走っていないか、体系的な理解を重視しすぎて正確な知識があいまいになっていないか、答練の点数だけを気にしていないか、答練の復習をしていて「知らなかった」ことを「知った」状態にしたから大丈夫なんて思っていないか・・・、いろんな原因があります。次には間違えないために自分に何が足りなかったのか。「後少し」が何かは考えなきゃいけない。「講師学習相談」とか「個別成績相談」とかで、お手伝いしかできないんですが、少なくとも、ヒントぐらいは見つかります。

ご自身のインプットのメインとなる教材、テキストにせよレジュメにせよ、それを大切にしてください。基礎力の確認をしながら、丹念にインプットを行ってくださいね。「理解すべきは理解し」「暗記すべきは暗記し」「正確にすべきは正確に」を

心がけてください。そして普段から、アウトプットの要素，必要なことを頭から出す，本試験時間中の頭の中の動きを練習することを学習に取り入れてください。

さて，お集まりいただきました先生方，ありがとうございました。これから，解答解説原稿執筆が待っていますね。がんばってください。

そして，平成27年第Ⅰ回短答式試験を受験された皆さん，お疲れさまでした。まだ，次の本試験に向けて地道な努力の日々を続けてください。効率的な勉強方法ってないです，効果的なものならあるかもしれないけれど。短答式試験にせよ論文式試験にせよ，厳しい試験になるかもしれませんが，がんばっていきましょう。2015年が良い年になりますように。